はじめに

毎年一度開催し、報告と活発な議論を行っている本プロジェクトの「黄河全体研究集会」の報告書は今回、加賀市で開催した研究集会をもって最終となる。本研究報告会は2003年に五カ年計画で開始した地球研の黄河研究チームが、途中の班追加を含めて最終的に、名古屋大学・環境学研究科の井村秀文教授を代表者とする「社会経済班」、本研究所の渡邉紹裕教授を代表とする「大型灌漑農業の実体調査班」、名古屋大学・地球水循環センターの檜山哲哉准教授を代表とする「黄土高原における大気境界層班」、本研究所の佐藤嘉展プロジェクト上級研究員を責任者とする「水文モデルによる黄河水収支の変遷解析班」、本研究所の木下鉄矢教授による「歴史資料による華北平原の黄河流路変遷解析班」。そして本研究所の谷口真人准教授を代表とする「黄河下流部及びデルタにおける地下水班」、九州大学・応用力学研究所の柳哲雄教授を代表とする「渤海の基礎生物生産解析班」の計７班で、代表者である福嶌は各班にまたがる課題間の調整と総合化に努めた。

この中で、現地調査を主としたのは大気境界層班と地下水班、渤海班であり、その他の班は現地調査と公表されている気象・水文・統計データ及び、歴史文書と文献資料から解析を進めた。

本報告書は個別の研究成果をまとめたものであるが、成果の公表としては、この報告書以外に、英文では News Letter をすでに、７号まで地球研のホームページにリンクされた YRiS（Yellow River Studies の略称）の home page に掲載されており、まもなく、最終となる８号が掲載される予定である。

一方では、本プロジェクトが目指していた、大気から陸面を通して海洋に至る水の経路とその使われ方がどのような結果を招いたか、についての総合的な成果を、環境問題に関わる学生や大学院生を念頭に置いた一冊の参考書として本年３月に出版される予定である。

一方では、我々が行ってきた研究の意図と黄河の実態を一般向けに単著として著した「黄河断流」は本年１月に出版されている。

プロジェクト研究としては我々の研究は本年３月をもって終了することになるが、「黄河断流」に象徴される乾燥地の水利用は、水汚染をはじめ様々な問題を内包していることも同時に判ってきている。今後、中国が積極的に改善の方向に舵をきる際には、我々の研究成果も参考にされることを願っている。

平成20年1月29日

黄河プロジェクト研究班代表
福嶌義宏（総合地球環境学研究所）